



Title	「オリエンタル」な日本人：イギリスの日刊紙The Timesの1985年日本関連記事から
Author(s)	花井, 晶子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 57-66
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/57293">https://doi.org/10.18910/57293</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「オリエンタル」な日本人

——イギリスの日刊紙 *The Times* の 1985 年日本関連記事から——

花井 晶子

## 1. はじめに

21 世紀に入っても日本経済は停滞が続き「失われた 20 年」と呼ばれているが、1980 年代の日本は世界第 2 位の経済大国としての地位を謳歌していた。Made in Japan 製品は世界を席卷し、日本の貿易黒字は記録的な数字を更新し続けた。他国は積み上げられる対日貿易赤字の解消を求めて、日本市場の開放を強く迫った。ついに 1985 年、日本は先進 5 カ国による「プラザ合意」<sup>1</sup>を受け入れ、円高へと大きく舵を切ることになった。それでもこの国の経済成長が止まることはなく、この流れは 1990 年代初頭のバブルの崩壊まで続いた。

このような日本の急激な経済発展は、ユーラシア大陸を挟んだ極西の地イギリスにも大きな影響を与えた。世界市場の場で日本企業が存在感を示していた 1985 年、イギリスの日刊紙 *The Times* では、膨大な対日貿易赤字に対する不満が繰り返し報道され、イギリス製品が日本で売れないのは、日本市場が外国に対して閉鎖的だからだとする批判が集中した。その中で、日本を西洋のルールに従わない特殊な国とする論調が叫ばれ、時には *Oriental* という語で日本人を形容した。最近ではその言葉を紙上で見つけることは少なくなったが、当時はそれが無意識下に使われていたのか、同紙の日本関連報道には散見されている。

本稿では実際の日本関連記事を読みながら、*Oriental* がどのような場面で使われ、そこに書き手のイギリス人のどのような真情を窺うことができるのかを考察していく。それが彼らの日本人を見る視点を解明する一つの手掛かりとなることを期待する。

## 2. 研究の目的と方法

1985 年の *The Times* には 1,089 件の日本関連記事が掲載された。その内容を大まかに分類すると、政治・外交 317、社会 156、経済・産業 438、文化・スポーツ 178 であった。記事の収集には、*The Times Archive*<sup>2</sup>と *LexisNexis Academic*<sup>3</sup>という二つのデータベースを利

---

<sup>1</sup> 1985 年 9 月ニューヨークのプラザホテルで開かれた G5 の蔵相・中央銀行総裁会議で、ドルの水準を下げるために協力することを合意した。この「プラザ合意」を受けた G5 の中央銀行はドル売りの協調介入を行った。伊藤ら (1996) 555-556。

<sup>2</sup> *The Times* のデータベースで、創刊時 1785 年から 1985 年の 200 年間の記事を収めている。

<sup>3</sup> 世界各国の新聞・雑誌など 5,900 以上の情報源を収納しているデータベース。*The Times* についても 1985 年 7 月以降の記事を検索することができる。

用した。入手した日本関連報道のうち、106 件が日本人に焦点をあてた記事であった。そこから **Oriental** をキーワードとして検索すると、18 件の記事が該当した。本稿ではその中の 2 件を扱う。そこで使用されている英語表現に着目し、その語るところを考察した。記事の分析には、N. Fairclough (1992) の CDA (批判的ディスコース分析) 理論<sup>4</sup>を利用した。また当時のイギリス社会の事情や対日関係、さらに日英両国の経済の動向を考慮に入れながら、時代の流れの中で同紙が伝える日本人観の分析を試みた。

**Oriental** に注目するのは、「古いヨーロッパ人中心的な **Oriental** (東方の)」が軽蔑的なものになったため、最近ではアジア人を指す時に **Asian** を使用するという背景がある。<sup>5</sup> また近年欧米で発行された辞書には、**Oriental** とヨーロッパ帝国主義との関連を明記するものもある。‘The term **Oriental** (a person of Far Eastern descent), which has many associations with European imperialism in Asia, is regarded as offensive by many Asians.’<sup>6</sup> 「オリエンタル (極東人の祖先を持つ人) という用語は、アジアにおけるヨーロッパ帝国主義を多分に連想させるものであるため、多くのアジア人に不快語と見なされている」 (拙訳)。

しかし 1985 年当時はまだ、**Oriental** という言葉が当の **Oriental** 「オリエンタル」<sup>7</sup> に対して、無意識に使われていた可能性がある。そこに日本人に対する書き手の正直な心情が読み取れると思われる。そこで本稿では **Oriental** という語に注目し、そこから見えるイギリス人のてらいのない日本人認識を探ることを研究の目的として、分析を試みることにした。

### 3. 1985年のイギリスの国内事情と日英両国の経済動向<sup>8</sup>

1979年の総選挙で勝利した保守党のサッチャー首相は市場に競争原理を導入し、国有産業の民営化を進めると同時に、国家の社会保障制度予算を削減したが、1月の失業率は過去最高の13.8% (334万人) を記録し、不況は止まらなかった。日本に対しては、貿易不均衡是正を求めるイギリスの対日批判が噴出。1971年以降イギリス側の入超が長く続いた。

この年のGNP (国民総生産) の日英比は13,660/4,742億ドルで、世界第2位と第5位を占めた。日本の値は5位イギリスの3倍近く、4位フランスの2.6倍、3位西ドイツの2倍であった。一人当たりGNPの日英比は11,300/8,390ドル、1ポンドは290円に相当した。

日本からイギリスへの輸入は47億ドルで、全体の80%を機械機器が占めた (自動車15.1%、事務用機器9.2%、テープレコーダー8.6%など)。日本への輸出は18億ドルで、機械機器類21.2%を筆頭に化学製品18.0%、食料品、繊維製品などだが、輸入はその2.6倍に当たる。対イギリスばかりでなく、日本の国際貿易黒字は膨らむ一方であった。

<sup>4</sup> Fairclough (1992) 185 - 192.

<sup>5</sup> アレン(1990) 137.

<sup>6</sup> Jewell and Abate (2001) 1207.

<sup>7</sup> この語が対象とする民族は必ずしも東洋人、アジア人とは限らず、エジプトやアラブ諸国の民も含まれるため、本稿では日本語に訳さず、そのまま「オリエンタル」とする。

<sup>8</sup> 花井 (2011) Vol. 20, 10.

1985年のイギリス人の日本人観をより深く知るためには、両国のこのような経済的背景を考慮に入れておく必要があると思われる。

#### 4. *The Times* の記事

最初に記事のヘッドラインを太字で記す。次に記事の発信地または執筆者、掲載日、掲載ページと続く。英文には日本語訳を付記する。注目箇所には下線を施す。

##### 4-1 **Beyond VJ Day** 社説 August 15, 1985, p. 11

The clash with Japanese culture, which showed a contempt for all the defeated that even the Nazis reserved for their Untermenschen, and was emphasized by the shock of conquest by Orientals, has left hatred of Japan in some hearts deeper than that for closer cousins in Germany.

(日本文化に特有の性質は、全ての敗者にあのナチスでさえも彼らの下等人種に対して控えていたほどの侮蔑を与えたし、オリエンタルに征服されたという衝撃によって強調されたために、この文化との衝突が人々の心に日本を憎む気持ちを植え付けてしまった。日本に対する憎しみは、イギリス人にとっては、より親しいドイツの従兄弟に対するものよりも、もっと深いものとなって残っている。)

この社説はイギリスの VJ Day (対日戦勝記念日) 40 周年の当日に掲載された。下線部の「オリエンタルに征服された」とあるのは、第二次世界大戦で最終的にイギリスは戦勝国となったが、初期段階ではアジアの戦場で大日本帝国軍に敗北を帰し、捕虜となって終戦まで収容されたことによる。<sup>9</sup> イギリス人がオリエンタルと呼ぶその地は彼らが先に征服した植民地であり、またオリエンタルは自らが長期にわたって支配者として君臨した、その地の原住民族を指す言葉であった。ここで日本軍をオリエンタルと呼んでいることから、日本人を彼らが支配した被植民と同じような人種と見ていたことが窺われる。

実際にヨーロッパ人はオリエンタルをどう見ていたのであろうか。明治期にイギリスから来日したお雇い外国人技師 H. S. パーマーは、次のように述べている。‘The idea of most Europeans, “from noblemen to tailors,” is that an Oriental, though possibly one of God’s creatures, hails from some substratum far down on the human scale, and is to be treated accordingly.’<sup>10</sup> 「ほとんどのヨーロッパ人が階級を問わず、“上は貴族から下は仕立屋にいたるまで”抱いている通念は、東洋人は神の創造物の一つではあろうが、人類的尺度から見れば、かなり下

<sup>9</sup> 1942年2月のシンガポールの陥落は、その象徴的なできごとであった。‘On 15 February 1942 the bankruptcy of the prewar Singapore strategy was blatantly revealed with the formal surrender of the island. In total about 130,000 British Commonwealth forces surrendered to General Yamashita Tomoyuki’s army of approximately 30,000.’ 「総勢およそ13万のイギリス連邦軍は、山下奉文大將率いる3万程の日本軍に降伏した」(下線部拙訳)。Lowe (1981) 180.

<sup>10</sup> Palmer (1894) 64.

等であろうから、それ相応なあつかいをすべきだ、ということであろう」<sup>11</sup>（下線は筆者）。ちなみにパーマーはこの時期 *The Times* の東京特派員でもあった。

引用文の一行目 ‘a contempt ... that even the Nazis reserved for their Untermenschen’ では、「あのナチスでさえも（彼らが下等人種と呼んだ）ユダヤ人に対して使わなかったほどの侮蔑」を、日本軍はイギリス兵を含む敗者に対して顕わに示した、とある。すべてに優越していると信じオリエンタルを劣等人種と侮っていたヨーロッパ人が、当の下等なオリエンタルの一つであった日本人から、ドイツがユダヤ人に与えた以上の蔑みを受けたということは、耐え難い屈辱であったことがここからも想像できる。

さらに、その日本人によって支配者としての自らの地位が奪われたのは、正に天地がひっくり返るほどの衝撃であり、許すことのできない恨みとなって残っているのであろう。かつては敵であったドイツ人を今では「従兄弟たち」‘cousins’ と呼ぶのに対して、西洋が優越人種であったはずのオリエントの最果ての国、「日本を憎む気持ち」‘a hatred of Japan’ は、イギリス人の心にそれ以上に深く沁み込んでいると言う。ドイツは戦争相手国であっても同じヨーロッパであり、人種的にも文化的にも隣人であるが、日本人はあくまでも別の人種であり、文化的にも彼らとは相いれないということが、次の引用からも認められる。

While Germany's trading strength earned envious plaudits, Japan's surpluses, low inflation and unemployment have cast it in its old role as the menacing outsider. Europe and North America now see their need to learn from Japan (if not to learn Japanese). But the West finds it culturally impossible to accept it as a natural state of affairs that Japan is top dog in world trade, and deduces it must be cheating, or that because Japan is so different normal rules do not apply.

（ドイツの貿易力は人もうらやむ称賛を得たのに対して、日本の国際収支の余剰、低いインフレ率、低失業率は、脅威をもたらすよそ者としての昔ながらの役割を日本に与えている。ヨーロッパと北米は今や日本から学ぶ必要があると見ている。しかし西洋は、日本が世界貿易のリーダーであるということを自然の状態として受け入れるのは文化的に耐えがたいこととし、いかさまをしているに違いないとか、日本はあまりにも違っているので、通常のルールが適用できないからだと推定している。）

ここでもヨーロッパの一員としてのドイツと、‘outsider’ 「よそ者、異端者」としての日本との役割の違いが明らかにされる。しかも日本はただの大人しく無害な「よそ者」ではなく、「威嚇するような異端者」という否定的な存在として語られる。そこにはかつて東方からヨーロッパに襲来した外敵である、13世紀のモンゴル帝国<sup>12</sup>、14世紀のオスマン帝国による侵略<sup>13</sup>と相通じる敵対感が感じられる。ドイツの繁栄については妬ましく思いな

<sup>11</sup> 樋口・大山（1987）22。

<sup>12</sup> ウェザーフォード（2006）249。

<sup>13</sup> クレーファー（1998）30-31。

がらも喝采ものだと賛同するが、日本についてはその成功を受け入れることを拒否し、不正を疑ったり、別のルールでやっているのだらうと邪推するのは、このような苦い経験が関係していると考えられる。

最後の一文 ‘Japan is so different’ からも、日本をヨーロッパとは「異質な」国であり、決して同等の仲間とみなしていないことが強調されている。Said (1978) に次のような記述がある。‘The Oriental is irrational, depraved (fallen), childlike, “different”; thus the European is rational, virtuous, mature, “normal.”’<sup>14</sup> 「オリエンタルは非合理的で、道徳的に腐敗して（墮落して）、子供っぽく、とにかく我々とは『違っている』のだ。ゆえに、ヨーロッパ人は合理的で、道徳的で、成熟していて、『正常』というわけだ」（拙訳、下線は筆者）。“different” は “normal” と対立的に位置づけされ、しかも引用符がついていることから、オリエンタルは＜正常ではない＞という意識、つまり＜異常＞なのだという言外の意が読み取れる。<sup>15</sup> 引用文の ‘Japan is so different’ にも、日本は大人のヨーロッパとは「別種の」、まともではない社会であるから、決してヨーロッパの上に立つはずはないという、ヨーロッパ人の強い優越意識を見ることができる。

A prediction to cover private emotionalism with a public mask of stoic accommodating and vague politeness has not helped Japan in the war of word over trade. It has encouraged bullying demands from the United States and from Mr Norman Tebbit<sup>16</sup>. It provokes charges that apparent concessions are not matched by action and leads to bizarre moves that pander to Western stereotypes of the comical orient.

（個人の感情を隠し、人前での冷静な適応やそれとなく丁寧さを見せかけたがるのが、貿易をめぐる舌戦の場で日本の役に立つことはなかった。それはむしろアメリカや、ノーマン・テビット氏からの、いじめとも言える要求を助長して来た。譲歩はうわべだけにすぎず、行動と一致していないという非難を引き起こし、この可笑しなオリエントの国についての西洋のステレオタイプに迎合するような、奇妙な動きへと繋がるものだ。）

一行目の ‘private emotionalism’ 「個人的な感情」を ‘a public mask’ 「公的な仮面」で ‘cover’ 「覆い隠す」とは、Buruma (1995) の、日本人は ‘the public posture (tatemae)’ 「人前での姿勢（建前）」と ‘the private feeling or opinion (honno)’ 「個人の感情や意見（本音）」とが異なっているという見方<sup>17</sup>と共通する。この二つの顔の使い分けについては、日本人を論じ

<sup>14</sup> Said (1978) 40.

<sup>15</sup> 今沢訳 (1993, 100) では「<sup>オリエンタル</sup>東洋人は非合理的で、下劣で（墮落していて）、幼稚で、『異常』である」と訳出している（下線は筆者）。

<sup>16</sup> Norman Tebbit は 1985 年当時イギリスの貿易産業大臣であったため、日本側との貿易交渉にあたった政府の当事者として、*The Times* 紙上に何度も登場する。

<sup>17</sup> Buruma (1995) 221.

る時にしばしば取り上げられる特性の一つと見られているが、ここではそれに対する不信感が語られ、そのような二面性は貿易交渉の場面では通用しないと非難している。

その背景には、日本の膨大な貿易黒字をめぐる他国の苛立ちがある。この年西ドイツのボンで開催された先進国首脳会議（ボンサミット）で、中曽根康弘首相は日本の貿易黒字を減少すると約束し、自国民にも外国製品を買うことを奨励した。しかし結果としてそれはただのポーズにすぎず、実際に海外からの輸入が増えるよりも、日本製品の輸出の伸びが止まらない現状に、口先だけの約束では納得できないと批判が絶えなかった。<sup>18</sup> この後日本企業は相次いで現地生産化を進め、雇用を提供することによって共存する道を選んだ。

最後の‘the comical orient’も注目される。この‘comical’もまた好ましい言葉ではなく、見下した視点が含意されている。<sup>19</sup> ここに定冠詞がついていることから、二つの解釈が考えられる。日本のことを指して「この可笑しなオリエントの国」と言い換えているか、あるいは、「例のあの可笑しなオリエント（とその住民たち）」という意識がイギリス人の間に共有されているとも考えられる。いずれにしても、日本が彼らにとって「可笑しなオリエントの国」の一つであったのは確かであろう。

#### 4.2 The golden silence of the Japanese From Our Tokyo Correspondent, Apr. 22, 1985, p. 11.

[Lead] There are some features of the Russo-Japanese war which, if they do not altogether escape European attention, certainly elicit very little comment. One is the reticence of the Japanese. When a prominent journal of St. Petersburg enunciated the doctrine that extermination, as one exterminates noxious vermin, was the only appropriate manner of dealing with Russia's present foes, an outburst of indignation might have been expected in Japan. There was nothing of the kind. The atrocious doctrine elicited only passing reference.

（日露戦争の特徴はいくつかあるが、たとえそれがヨーロッパの注目を全く免れないとしても、ほとんど何の見解も引き出すことがないことは確かだ。理由の一つは日本人の沈黙である。サンクト・ペテルブルクの著名な雑誌が、人が毒虫を根絶させるのと同様に、ロシアの当面の敵を取り扱うには皆殺し以外に適切な方法はないという政策を公表した時、日本で憤りの爆発が起こってもよかったのだが、その種のことは何もなかった。この非道な政策についても、ほんのわずかな言及を引き出しただけに終わったのだ。）

<sup>18</sup> 中曽根のこのような態度について、Reading (1993) が次のように述べている。‘Yasuhiro Nakasone was a master of the art of saying much and doing little.’ 105. 「中曽根康弘は口先だけの約束術の達人であった」（拙訳）。

<sup>19</sup> 「英語の comical は本人は人を笑わせようと思っっているわけではないのに、はたから見ておかしいような場合に使う。人を笑わせようとして何かをする場合には comic を用いる。したがって comic performance は『喜劇的演技』だが、comical performance は軽蔑的または皮肉な意味になる」竹林編(2002, 2008)。また Simpson and Weiner (1989) Vol. III. 537 では、comical に ‘Queer, strange, odd. colloq.’ 「奇妙な、r 異様な、奇怪な。口語的」（拙訳）という記述がある。

日本では<沈黙は金、雄弁は銀>ということわざがあり、弁舌に長けているよりも口数が少ない方が値打ちがある、とされている。日本人の沈黙というこの特性は、日露戦争当時のロシア側の日本への非道な言動に対しても発露された。

‘Russia's present foes’「ロシアの当面の敵」と言えば当然日本のことであつたが、当の日本人はロシアが敵の皆殺しを図るがよいと表明したと言うのに、それを声高に非難することもなく、ほとんど自ら話題にすることもなかった。この仮定法過去完了形 ‘an outburst of indignation might have been expected’「憤慨の大合唱が期待されていたかもしれなかったが」からは、なぜ抗議の声を挙げないのだという、書き手の非難や苛立ちの気持ちが言外に示され、日本人は物言わぬ、不可解な人々という否定的な印象を与えている。

しかも日本人の沈黙はこれに留まらない。以下は上記の引用文に続く文章であるため、‘Nor’という否定語で始まっている。

Nor was much larger attention bestowed on the crusade of the Russian religious Press denouncing the Mikado as Anti-Christ, declaring that the pagan Japanese must be crushed and seeking to revive, in all its savage cruelty, the religious intolerance of medieval Europe. Such an occasion to point the finger of scorn at Christianity might have been seized and power fully utilized. On the contrary, even the religious publications of Japan scarcely noticed it.

(それに、それ以上の注目がロシアの宗教新聞の反日的キャンペーンに与えられることもなかった。そこではミカドを反キリストと公然と非難したり、異教徒の日本人を壊滅しなければならぬと宣言したり、凶暴な残酷性に満ちた中世ヨーロッパの宗教的不寛容を蘇らせようと目論んでいたというのに、このような機会を捉えてキリスト教を嘲笑し非難すればよかったし、権力を大いに利用すべきだったであろうが。それなのに逆に、日本の宗教関連の出版物でさえ、ほとんどそれに目に留めることはなかった。)

ロシアの宗教新聞では日本人を怒らせる反日的な記事が掲載された。天皇を‘Anti-Christ’「キリスト教の敵」あるいは「にせキリスト」と呼び、「異教徒の日本人を壊滅させる」と言うものだが、ここで注目するのは、ロシア語で展開されたであろうその内容についてではなく、それに続く記者の論調である。

‘Such an occasion to point the finger of scorn at Christianity might have been seized and power fully utilized.’ここにも仮定法過去完了形が使われ、「キリスト教を非難すべきこのような機会を捉えたらよかったのに」、実際には日本人はそれに対して大騒ぎをすることもなかったし、「権力を十分に利用すべきだったのに」実際にはそのような動きはなかった、という失望や反感が見られる。‘even the religious publications’「宗教関連の出版物でさえ」の‘even’からは、少なくとも宗教界はこのことを問題視すべきだったのに、それをしなかったことに対する強い非難の意図が感じられる。全く日本人は何を考えているのか分からない、不気味な人たちだという、書き手の気持ちがここからも伝わって来る。

No one, unless he had lived in the East and by actual observation learned to appreciate the contempt entertained by the average Occidental for the average Oriental, and the sense of freedom from all legal restraint that marks the former's attitude towards the latter, could have foreseen in full measure the horrors that would surely attend a Russian campaign in China or Korea ...

(もしも東洋に住んだことがなかったなら、そして実際の観察によって、普通のオリエンタルに対して普通の西洋人が抱いている侮蔑と、ある種の感覚とを認識できるようにならなかったならば、実はその感覚とはオリエンタルに対する西洋人の態度を特徴づけるもので、あらゆる法的な拘束から免れていられるという感覚なのだが、誰一人、中国や朝鮮でのロシアの軍事行動に必ず付随したであろう惨事を、十分に予知することはできなかったはずであった。 . . . )

長い一文で、‘No one, ..., could have foreseen’ 「誰も予見できなかったはずだった」という仮定法過去完了形の帰結節の途中に、unless で導かれる否定の条件節が挿入されている。条件は二つで、‘unless he had lived in the East’ 「東洋に住んだ経験がなかったら」と、‘by actual observation learned’ 「実際の観察によって学ばなかったら」となる。つまり、単なる通り一遍の旅行者ではなく東洋に長期間滞在したことがある人で、しかも自分で実際に見聞きした体験のある人、という二つの条件が満たされなければ誰も見越すことができなかつたはずだ、という仮定法を読み替えると、実際にはそういう人がいたことになる。実はロシア人は中国や朝鮮で ‘horrors’ 「惨事、おぞましい事」をしていたのだ、と伝えている。

この引用文にも、‘the contempt entertained by the average Occidental for the average Oriental’ 「普通の西洋人が普通のオリエンタルに対して抱いている蔑みの気持ち」とあり、西洋人は誰でもオリエンタルを蔑視したが、それを当然のこととする共通の意識があったことが明らかにされている。これは上述の社説記事、**Beyond VJ Day** で述べたパーマーの言葉と一致する。さらに、‘freedom from all legal restraint’ 「あらゆる法的な拘束がないこと」からも、ロシア人がオリエンタルに対して当たり前に関心を持ち、法にも縛られないまま、オリエンタルの国々で好き勝手に振る舞っていた実情が語られる。

このロシアの暴挙についても日本人の反応は鈍く、沈黙が保たれた。日露戦争は 1904 年に始まり、ちょうど 80 年前の 1905 年に終わった。第一次世界大戦よりも古い戦争であった。しかもイギリスは当事国ではなかった。しかしこのような遠い昔の異国間の戦争を取り上げるにより、不可解な日本人への違和感を十分に掻き立てる記事となっている。

#### 4. まとめ

本稿では 1985 年の *The Times* の日本関連報道から、日本人を表象する語として **Oriental** を使用している記事を選び、そこから推察される当時のイギリスの日本人観を考察した。引用した二つの記事で述べられた、本音と建前を使い分ける日本人の二面性に対する不快感や、憤りや非難を表明するべき時にも自らの意見を言わず沈黙を続ける日本人への違和

感は、自分たちとは異質な奇妙な民族であるという、否定的なイメージを伝えるものであった。Oriental という言葉が複数の記事に見られるのは、無意識の中にも日本人を、植民地であった多くのアジア諸国と同じ劣等人種と捉えていたと推察される。

西洋人に共通するこのオリエンタル蔑視感に正面から取り組み、問題提起をしたのが、1978年に発表された E. W. サイドの『オリエンタリズム』であった。Fox (2001) はこれ以降、それまでの Orientalism 「東洋学、東洋趣味」の意味に革命的な変化が生じたとし、その変化を ‘[His book *Orientalism*] turned Orientalism into a pejorative term that carried political meanings.’<sup>20</sup> 「Orientalism という言葉を政治的意味合いのある軽蔑語へと変換した」(拙訳) と言う。それまではむしろ学術的な意味づけで語られていた Orientalism という語に、オリエンタルを劣ったものと見る西洋人の無意識な感情が潜んでいたことが顕在化されたのであった。彼らのこのオリエンタルへの蔑視観は「オリエンタリズム」と呼ばれるが、イギリス人にとって当時の日本人は、厳然たる「オリエンタリズム」の対象の一つであったと思われる。

その背景にイギリスが抱えていた諸事情を見ることができる。第二次世界大戦では戦勝国となったイギリスであるが、戦後 40 年経った年の GNP は敗戦国であったはずの日本の 1/3 に留まった。日本からの輸入は輸出の 2.6 倍に達し、失業率は過去最高を記録した。Chapman (1852) は「わが国の輸出貿易は我々の繁栄の指標であり尺度である」<sup>21</sup>と述べたが、日本は世界中に製品を届ける産業立国として、イギリスをはるかに凌ぐ存在となっていた。世界第二位の経済大国であるのみならず、債権国としてもこの年世界一位の座を占め<sup>22</sup>、かつてイギリスが世界の経済地図上で占めていた地位を次々と塗り替えたのである。

しかし成長の坂道を破竹の勢いで駆け登って行く日本の姿は、西洋諸国には苦々しいものに映ったことであろう。かつては七つの海を制し世界一の繁栄を誇った大英帝国にとっても、日本は 100 年ほど前に近代化を教えた生徒であり、40 年前にはアジアの戦場で闘った敵国であった。イギリスを代表する新聞が日本人を Oriental と呼ぶのは、貧しい有色人種の小国と侮っていた極東の島国に、経済的に追い越された敗北感や恐怖があることを感じさせる。さらに、怒涛のごとく押し寄せるこの国の製品のせいで自国の失業が増え、不況が止まらないのだという不満や憎悪の気持ちも、この言葉に込められていると思われる。

21 世紀になると、紙面からさすがに Oriental は少なくなって行く。しかし、まだわずか 30 年前には社説にもこの言葉が登場したほど、普通に使われていたことは注目に値する。ただ、たとえ新聞というメディアからは Oriental が削除されたとしても、西洋人の心の中に長年にわたって育まれたオリエンタルへの蔑視意識が、短期間に容易に消えるとは思えない。日本人もまだその対象から免れ得ないことを、心に留めて置いてよいだろう。

<sup>20</sup> Fox (2001) 10976.

<sup>21</sup> ‘Our export trade is the index and measure of this success [our prosperity].’ Chapman (1852) 360.

<sup>22</sup> **Finance fears that lurk behind the great boom** Douglas Anthony *The Times* Jun. 23, 1985, 35.

参考文献

- アレン、I. L. (1990) 岩崎裕保監訳『アメリカの蔑視語』明石書店
- 伊藤元重・猪木武徳・植田和男ら編、貝塚啓明・葛西泰・野中郁次郎監修 (1996) 『日本経済辞典』日本経済新聞社
- ウェザーフォード、J. (2006) 星川淳監訳、横掘富佐子訳『パックス・モンゴリア～チンギス・ハーンがつくった新世界～』日本放送協会
- クレイファー、U. (1998) 戸叶勝也訳『オスマン・トルコ～世界帝国建設の野望と秘密～』アリアドネ企画
- 竹林滋編 (2002, 2008) 『新英和大辞典第6版』研究社 (電子辞書)
- 花井晶子 (2011) 「エコノミック・アニマルへと変貌する日本人へのまなざし—イギリス *The Times* の1965年、1975年、1985年「日本特集」経済記事から—」『大阪大学言語文化研究』 Vol. 20, 3 - 13
- 樋口次郎・大山瑞代 (1987) 『条約改正と英国人ジャーナリスト (H.S. パーマーの東京発通信)』思文閣出版
- Buruma, I. (1995) *A Japanese Mirror* London: Vintage.
- Chapman, J. (1852) The Government of India. *Westminster Review* Vol. 57, 357-405.
- Fairclough, N. (1992) *Discourse and Social Change* Cambridge: Polity.
- Fox, R.G. (2001). 'Orientalism' In *International Encyclopedia of the Social Behavioral Sciences* Vol. 16., Smelser, N. J. and Baltes, P. B. (Eds.), Oxford: Elsevier Science Ltd.
- Jewell, E. J. and Abate, F. R. (Eds.) (2001) *The New Oxford American Dictionary* New York, Tokyo: Oxford University Press.
- LexisNexis Academic: <http://www.lexisnexis.com/ap/academic/?lang=en> (最終参照日 2014/2/10)
- Lowe, P. (1981) *Britain in the Far East: A survey from 1819 to the present* London, New York: Longman.
- Palmer, H. S. (1894) *Letters from the Land of the Rising Sun* Republished in 2004 as one of the series of Japan in English: Key Nineteenth-Century Sources on Japan Vol. 38. Henry Spencer Palmer *Letters from the Land of the Rising Sun: Being a Selection from Correspondence Contributed to "The Times" between the Years 1886 and 1892* (1894). London: Ganesha Publishing, Tokyo: Edition Synapse.
- Reading, B. (1993) *Japan: The Coming Collapse* London: Orion Books.
- Said, E. W. (1978) *Orientalism* London: Penguin Books. 板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』上 (1993)、平凡社ライブラリー
- Simpson, J. A. and Weiner, E. S. C. (Eds.) (1989) *Oxford English Dictionary* 2nd Ed. Vol. III, Oxford: Clarendon Press.
- The Times Archive Online: <http://archive.timesonline.co.uk/tol/archive/> (最終参照日 2008/8/9)